



《婦人の肖像》 1902年 ゴットフリート・ケラー財団（新ビール美術館寄託）

KARL WALSER

スイス絵画の異才

カール・ヴァルザー

〔仮称〕

2026 4/18 SAT—6/21 SUN

休館日 月曜日（5/4、6/15 は開館）

開館時間 10:00～18:00（金曜日～20:00）＊入館は閉館の30分前まで

主催 東京ステーションギャラリー（公益財団法人東日本鉄道文化財団）

企画協力 キュレーターズ



東京都千代田区丸の内 1-9-1 [JR 東京駅 丸の内北口 改札前]
Tel. 03-3212-2485 <https://www.ejrcf.or.jp/gallery/>

先行プレスリリース

謎めいた神秘性を湛える
初期の象徴主義的作品群

20世紀前半のスイスで活躍した異才カール・ヴァルザー（1877-1943）は、ベルン近郊のビールに生まれました。1歳下の弟ローベルトは作家になり、後にその著作にカールが挿絵を描いています。20代でベルリンに出たヴァルザーは、革新的な表現を目指したベルリン分離派に加わり、象徴主義的な絵画作品をいくつも残しています。そこはかかない暗さと精妙な色彩をあわせもつその作品群は、謎めいた神秘性を湛え、見る者を惹きつけてやみません。

《舟遊び》制作年不詳
ゴットフリート・ケラー財団
（新ビール美術館寄託）



《歌舞伎女形（傾城阿古屋）》1908年
ベルン美術館 ©Kunstmuseum Bern



日本の風景と風俗—
特に宮津の芸妓と
歌舞伎を描いた水彩画



《少女と、人形の乳母車》1905年以前
新ビール美術館

ヴァルザーの生涯で特筆すべきことは、彼が日本を訪れて制作をしていることでしょう。1908年にドイツの小説家ベルンハルト・ケラーマンと共に来日したヴァルザーは、横浜や宮津（京都府）などに滞在して、熱心に日本の風景や風俗を描きました。これらの作品は当時の様子を伝える貴重な資料であると同時に、美術的にも非常に優れた見応えのあるものばかりです。その多くは水彩で描かれていますが、これまでほとんど公開されてこなかったために、驚くほど鮮やかで美しい色彩を残しています。本展は、これらの仕事に加えて、挿絵や舞台美術、壁画でも活躍したヴァルザーの全貌を伝える画期的な試みです。全作品が日本初公開となります。

《祇園祭、八坂神社の宵宮》1908年 新ビール美術館



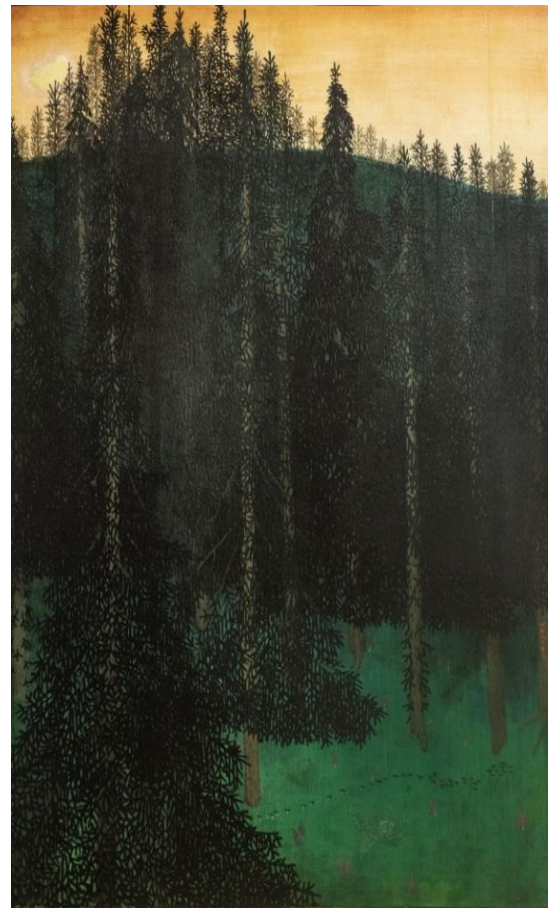
本展は当館で開催後下記に巡回します

大阪中之島美術館
2026年7月4日～9月27日

広報に関するお問い合わせ

東京ステーションギャラリー
学芸室
Tel. 03-3212-2763

全点日本初公開！



《森》1902-03年 新ビール美術館